

【銀マド・名作選】

初霜や八朔ひとつ供えたる

マイナス5.5℃の寒気団が1200メートルの上空に辿り着いた。今年、最初の寒い朝だ。8時過ぎに不燃物ゴミを置きに近所の角まで突っ掛けで走っていくが、足の指先が冷たかった。靴下を履かねばならない季節になったなど沁み沁み感じる。

そのことが反対に嬉しいようにも思えてウキウキもする。寒くて冷たいのは嫌いなくせに、ガラス越しに温い陽射しを浴びながらソファーに掛けて本を読んだり手紙を書いたりする、そんな冬が好きなのである。

冬を迎える前に済ませておかねばならないことが幾つかある。山から切り出した薪を風呂焚き用に割ることや、北風を除けるための藁囲いを家の周りに組み上げるのを手伝うのは子どもの仕事だった。

現代ではそんな風景はどこにも残っていないが、霜が降りる季節になると心を引き締めて覚悟を決めるように人々は「冬支度」に取りかかった。

縁側で母とふたりの障子貼り ねこ

障子貼りも冬支度のひとつであった。縁側には優しい光が降り注いでいた。庭の花畑は枯れた色に変わっていたが、父の育てている菊は元気に咲いていた。そして蜜柑の木には橙色の——だいたい色という言葉の響きも懐かしい——実が幾つもなっていた。もぎ取って食べても酸っぱいだけで一度も家の蜜柑など美味しいと思ったことなどなく、店で売っている万遍なく綺麗な蜜柑のほうが甘くて好きだと言っては父や母を残念がらせたものだ。

思い出は脆いもので、この蜜柑の木ももう誰も食べる人が居なくなったから役目が終わりだということで父が切り倒そうとしていたところに実をひとつもぎ取って食べたら、栽培物の味とは全く違った酸っぱさがこの上なく美味かったのを思い出す。

父が逝って十年以上が経つが、時代は変遷して、今そこに父が植えていった八朔(はっさく)の木があり、背丈の倍以上にもなって鈴なりの実をつけている。

初霜や八朔ひとつ供えたる ねこ

2008年11月19日(水曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#), [十七音のおと](#)

大晦日 所感。不便を見つめる……

朝日新聞、高橋論説顧問が12月31日の朝刊で莊子を参照している。

――
莊子：反機械論

天地篇第十二

子貢が旅をしていたときのこと。老人がひとり、畑仕事をしていた。手仕事で、見るからに能率が悪そうだった。子貢は言った。

「ハネツルベをお使いにならないのですか。ハネツルベを使えば、流れるように水を汲めて、一日に百畝(うね)も水をかけられますよ」

「わしは師匠から習った。『機械』を使う者は必ず『機事』がある。『機事』がある者は必ず『機心』がある。『機心』が胸のなかに存在すると、純白な心がなくなる。純白な心がなくなると、精神の本性が定まらない。精神の本性が定まらなければ、道に載せてもらえない。わしはハネツルベを知らない訳ではないが、恥ずかしいから使わないのだよ」

参考先；加藤徹 KATO, Toru (Japan)

<http://www.geocities.jp/cato1963/index.html>

――
▼昨晩は、昨日までと変わって木枯らしがきつく吹き荒れた。寒波が来ているのか、雪が降っているところもあろうな、と思いがらうつらうつらした。言葉にならないで苦心していることが、少しずつイメージとして頭の中を通り過ぎては消えてゆく。

不便さが必要なのだ。不便を承知することが大事なのだ。そんなことを考えていた。

29日の日記、師走、所感で

Q2) エコに気を使って冬を乗り切るアイデアは？

と書いた。

快適で、幸せであれば良いのか。その心の思うところは、まさに莊子がいう「機心」であったのではないか。

▼情報処理学から情報工学へ、サイエンスからテクノロジーを学びながらそして仕事で使いながら、今までここまでやってこれたのだが、昨今の情報技術社会には一矢を投じるべきだ、とも言い続けてきた。進化すべき矛先が間違っている。哲学なき暴走だとも言ってきた。

私たちは、便利、快適、イコール幸せという図式を作ってきたのだが、その裏には中流意識、富めることの麻痺性、それに伴う虚栄像がついてまわる。

(省エネを実践するのに、カッコよくしなくてはならないと考える人が多い。だからエコバックなのだ。)

▼そこまで書かなくても、と言って職制のチェックで保留になってきたことがいくつもある。

そのいくつか

- ・テレビ事業は夜の10時ころには放送終了。国民は寝なさい。
- ・某放送局は即座に深夜の放送を中止すべきだ。
- ・朝の5時に起きてウォーキングなり体操なりをして健康増進に努める。
- ・ガソリンの高騰は、過去の歴史を見ても最大級であるにもかかわらず、ノホホンとしている神経のボケ具合に気づきなさい。
- ・昔、オイルショックの時には、テレビ放送も自粛していたのに、今はその影すらない。
- ・「環境と経済の両立」なんて、大義名分のマヤカシに国民は真剣に疑問を持つべきである。

▼エコに気を使うとか使わないとかに関係なく、人は少し不便を味わい、知恵を絞ることを甦らせねばならない。温温とし

た環境の下で、新しい解決手段など浮かばない。

前述の質問には大勢の人が「厚着をして乗り切る」と答えている。

しかし、包含している課題は果てしなく奥が深いのだ、ということを知識しなくてはならない。

▼もうひとつ。

テレビを消して…ラジオを聴こうでも良いし、目を閉じて考えようでも良い。

視覚に飛び込んでくるお笑いを見ていて、ヒトはお笑いの本質を忘れると同時に考える能力を失ってゆく危機を迎えると感じた。

落語でも文化講演会でもいい。目を閉じて聴いてみることを忘れてしまっは、やはり、失うモノが大きい。

見栄や虚栄を棄てて、不便を承知で今に挑まねば未来はない。そう断言してもよい時代を迎えている。

2007年12月31日（月曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

逝った人

3月に、時実新子さんが(10日)、7月に、小田実さんが(30日)、続けて、8月に阿久悠さんが(1日)逝ってしまった。

いつかはそのときが来るにしても、いざ来てしまうと悲しい。

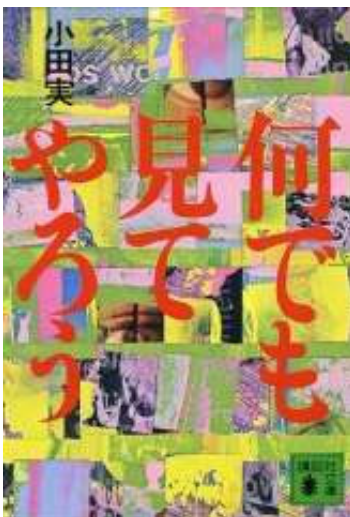
今年のこの3人は、私の人生に大きな影響を与えた作家さんたちのなかでも、最も巔にいた人たちばかりだ。



▼時実さんは、朝日グラフに連載していた「川柳新子座」でぞっこんになってしまった人だ。

宮本輝が「月光の東」という小説で主人公の生き様を「凜冽に生きてきた」と表現しているが、時実さんもそんな人だった。「小説新子」を読んでみるとその一部が書かれている。

彼女の川柳は、私の人生を揺るがすほどに強烈だった。その強さと厳しさと弱さに、人生というものを考えさせられる。



▼小田さんは、大学時代に貪るように読んだ。

「何でもみてやろう」なら知ってるわという人も多いはずだ。

今の時代に書店に並ぶ書籍の題名のように、自分を弁解または補足説明するかのような長たらしいタイトルではなく、小田はこう考えてこう行動するのだ、と明確に切り出してくれる。

▼阿久悠さん。

この人の作品は、唄にならなかったものや小説／作品集として文庫・新書で出版されたものよりも、音楽に乗せて作られた作品のほうが素晴らしい。

まさに、涙なくして聴けない。

いったいあのお顔のイメージの何処から作詞作品のような感情や情景が生まれてくるのだろうか。

人の心は儂いものだ。歌は口ずさまれて、人の心のなかを旅する。まぶたに浮かぶ風景が目まぐるしく揺れている。ひとりで静かに歌いたいと思う。



2007年12月13日 (木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

研ぎ澄ます

そういえば、駅の待合室から伝言板が姿を消してしまっている。

区切り線を引いた黒板と白墨が、人ごみの溢れる駅の片隅に置いてあったのを憶えているだろうか。待ち合わせで想いの叶わなかった人がそこに伝言を書き残すのだ。

ケータイ電話を誰もが持つ時代に伝言板は不要なのだろう。個人情報だって書きこめるので、或る意味では厄介モノなのかもしれない。

もしかしたらあと五分待てばやって来て巡り会えたかもしれないのに「先に行く、次の駅で待っている」と書き残す。「しばらく待ちましたが、時間なので出発します。今度、お目にかかったときに」というようなケースもあろう。そこにはドラマがあり悲哀があったはずだ。

止むを得ず先に列車に乗る人は、限りなく想いを巡らす。もしも、あと一分待てば…その人は現れたのかもしれないのに、置いてゆかねばならないのかもしれない。

いや、もう逢えないような別れが用意されていたのかもしれない。

一足先に汽車に乗っても、想いも人もあとから追いかける。

ケータイ電話や公衆電話を悪害視するわけでないが、リアルタイムに応答を得たり送出することばかりが合理的で理想的なことであるとはいえないのではないかと常々思っている。

現代人は、相手の心理やその場の雰囲気を読むことに、その予測能力や神経を使う。会議の進行に気を使い、帰宅すれば家庭を取り巻く社会や友人関係にも神経をすり減らす。

その反面、平気で待ち合わせに遅れたり、ケータイ電話一本で仕事をキャンセルする。

お世話になったお礼を伝える、年季の挨拶をするなど、本来であれば細心の神経を使わねばならないことに対し、電話一本でおざなりに始末しているのを見かけることがある。

先日から「研ぎ澄ます」という言葉が気に掛かっている。

現代人は、あらゆるところで神経を使い、思い悩み、気持ちを「研ぐ」ことに鍛錬を惜しまない。しかし、本来、人は、人の心を探るといふセンシング機能を、利害や損得を推測すためだけに注ぎ込んでいたわけではなかったはずだ。

一目見て余計で無駄だと判断したモノを次々と切り捨て、あたかも自分の精神も、生活も、実の姿も、研ぎ澄まされてゆく…錯覚に陥っている。

伝言板の白墨の文字を見つめながら、書いて立ち去った人の心を想像するような人の姿は今やどこにもない。こんな余裕を喪失してしまった現代人は、自らの力で研ぎ澄まされたモノに出会う機会にも恵まれなくなってゆく。

数式の上で誤差率を消滅(キャンセル)させたシナリオに振り回され続け、汗を拭き拭き動き回る。

ほろ苦い

▼夏休みの思い出はこの歳になってなおさらほろ苦いモノになっている。苦味というのはビールのようにひと味付けるのには最適で、ややもすると、癖になる魔力さえ持っていながら、しかし、味そのものを論じれば決して美味しいものとはいえないだろう。ほろ苦いモノを指折り数えると、淡いものから濃いものまで、今となってはどうでもいいことから、そうでないものまで、様々なことが次々と浮かぶ。

▼7月末から8月いっぱいまで休暇を取ってバイクで旅に出たことがあった。自分では「東北激走4800km」と名付けて、大きな思い出になっている。また或るときは、初恋のような感動だった、と後になって振り返った旅もあった。旅は、あらゆる面でほろ苦い。

▼貧乏な学生時代の夏休みは、日頃から古本屋で買い込んで積読になっている何十冊もの本を片っ端から読んだ。バイトにも行かず、実家の和室に寝転がってゴロゴロとしながら読書をした。中学高校時代まで遡れば、一学期に顔を合わせてキャンキャンと騒いでいたクラスメートの女の子に9月まで会えなくなると思い沈み込む日々を送った。

▼梅雨の合間に広がった大空を小さな鳥が高く高く飛んで夕焼けのほうへとゆくのを見上げながら、鳥になりたいという夢を持ったことのある自分を思い出して、もしかしたらそれは間違いだったかもしれないと、ふと、考えた。何故なら、あの鳥はいったい何処を目指して何処まで飛び続けるのか、飛ぶことは苦しいことではないのだろうか、変化のない景色を見下ろし飛び続けることが面白いのだろうか、などと想像してしまったからだ。

▼多かれ少なかれ、私たちは自由というものを与えられ、同時に束縛も受ける。この相反する力学の均衡がヒトの気持ちを向上させてくれることは自明で、自由の中に放たれること夢見て、それは大空を自由に舞う鳥のような姿だと考えて夢を追い闘志を燃やすのだろう。

▼鳥たちが自由に飛ぶのを見ていると、確かに疲れ果てれば地上に降りてくればいいと思う。ところが、よくよく考えると、一旦降りてしまえば餌の在り処も見えなくなり、また飛ばねばならない。果たして鳥たちは飛ばねばならない宿命を背負いながら幸福なのだろうか。

▼昔、無人島哲学論(ねこ著)の中で、「スズメは何故電線から落ちないのか。それは、落ちそうになったら跳べばいいのだから」と書いたことがある。だが、スズメは飛ぶために生まれた鳥ではない。電線に止まるために生まれた鳥なのかもしれない。

▼飛べないブタは只のブタ。紅の豚の中に隠されたオトコのロマンへの夢というのは、我々が何かを実現するために、一方で苦し紛れに握りつぶしてきた人生の犠牲というモノに感じるほろ苦さであった。だからこそ、夢は果てしなく、或るときは儂くある。ロマンとはそういうモノだ。

▼苦味とは何だろうと考えて、空想が拡散してしまったが、要するにこれまでの人生で自由を獲得しようとしてきた自分の行動や思想を、自ら否定しようとしているかなと思う。それは、つまり、NEXTをどうするのかという問題提起であり、その問題解決の手段の中にもあのほろ苦さを混ぜこめるような人生でありたいと考えているのだ。

▼先日、娘が二十歳になった祝いにビールでもと思って薦めると、苦いので飲みたくないと言う。では、私たちがあのビールの苦味をウマイと感じたのはいつのことだったのか。苦いビールを、初めてウマイと感じた瞬間の自分はどんな顔をしたのだろうか。あのときまで時間を巻き戻せば、飛べるわけもない空を見上げて、再びでっかい夢を持てるようになるだろうか。

進化というもの

自分自身のことを思うと、やはり進化に乏しい。

しかし、人生の足跡が、ただまっすぐではなく、いくつかの曲線で織り成されているのだとすると、その関数は見事なほどに美的であるはずだ。

2007年4月16日（月曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

ふと、懐かしい

今朝の新聞(朝日)を開くと、私が以前居た会社が5000人のリストラ…などと書いている。今はもはや人員整理とか早期退職者とかいう表現をとらずに、あからさまに「リストラ」と書いても、世が受け入れる時代になったのかもしれない。

私が辞めたときは公表で約1万5千人だったが、噂では2万人という声もチラホラだった。そのチラホラの背景には、人材は「人財」だ、と神様のように言い奉り上げ、社員の頑張りを煽りあげようとする社風の裏腹に、社員など財(マネー)の種でしかなく金を生み出す道具だとしか思っていないという実態がある。そのことを、暗に社員は気づいているからこそ、噂も生まれてくる。

もとは創業者の偉大なおかげで社会的なステータスも高まっていたのであるが、この思想のころから所詮使い捨て文化の理念が底流にあったと、今になって振り返ることも出来よう。まあ、多くのことを学ばせてくれた感謝すべき会社だが、もはや私には関係ない会社だから、あまりのことは言えないのだが。

今お付き合いをしていただいているいくつかの会社の方々はこの会社の話をして、「会社はこうでなければ上昇して増殖することは出来ないし、優秀な商品は出来ません」ということがある。

しかし、「人の心は枯れ果て、人間性や創造性を失い、管理されることに長けた面白くない人間が増えてしまう恐れもあります。その危険性を数字でデジタル処理して分類処理し画一的な判断を加えた結果が、現代社会の最も醜いモノを作り上げてきたのだということを、多くの国民も気づいていながら、寄らば大樹の陰であり我先勝手の論理で乗り切ろうと」している。

5000という数字そのものは私には関係ない話だが、この数字が何を物語るのかは無関係の人々でも考えねばならないのではないかと思う。

さらに、「人間を枯れさせてはいけません、枯れた人間が考えたものは、いずれ枯れてしまうかもしれませんが、多くの点を真似しても構いません(真似すべきことも多いです)が、良い点を数ポイントに絞って残りをばっさり切り捨てなければいけない」と、あくまでも雑談レベルですけど、話します。

「痛みを伴う…」という表現があるが、矛先を誤った茶番劇に使われてはまったくこの言葉が気の毒です。

2007年3月10日(土曜日) [【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

年頭雑感「新戦略」

新年 明けましておめでとうございます。
どうぞ、今年もよろしくお祈りします。

去年の3月に辻信一さんの回想をちょっとお借りした。

>政治学者のダグラス・ラミスの著作を回想して辻信一氏がこんなことを
>書いていました。

>都心に雪が積もった日、彼(ラミス)とある言語学者は会話を交わしてい
>た。ビルの窓から見ると、眼下の公園に職場へと向かう人たちの足跡が
>ついている。定規で引かれたようにまっすぐだ。ラミスは言う。雪国で
>見る野生動物の足跡は必ず曲がっている。

>ウサギやネズミがあのようなまっすぐな足跡を残すのは、捕食者に追わ
>れているときだけだ。それを聞いた言語学者が呟く。

>「だったらあの人達を追いかけているのは何だろう」。

> (時、金、そしてメトロノーム)

>3月3日は桃の節句。桃といえば子供のころにお伽噺で聞かされた「桃太
>郎」や三国志演義で有名な「桃園の誓い」などを思い浮べます。

>この物語の時代の人々は、きっと、「定規で引かれたようにまっすぐ」

>には歩かなかったのだろうか、と思いました。

>いえいえ、私たちが大切なものを見失ったのはそんな昔のことではなく、
>つい先ごろのことなのかもしれません。

(中略)

>マネーや時間という麻薬のようなモノサシから少し目を逸らすことで、
>「環境」というキーワードの向こうに存在する違った世界が見えてくる
>ような気がします。時代を超えて語り継がれてゆく、かけがえのない示
>唆のようなものが、そこに存在するのではないのでしょうか。

参考: ちょこっと日記 > 2006年03月分 > 桃の節句に考える

<http://www.eco.pref.mie.jp/nikki/200603031925121500/index.htm>

自分のこの文章を読みながら、一向によい方向へと舵を切らない政治にある種の無力を感じる一方で、無力や諦め感に侵されてはいけないのだとも思った。

もう少し、「新戦略」でがんばろう！

元旦の朝日新聞・社説は、「戦後ニッポンを侮るな 憲法60年の年明けに」という表題で

>キリマンジャロのような高山から、しだいに雪が消えつつある。

>氷河はあちこちで「元氷河」になり、北極や南極の氷も崩れている。

>このまま進むと世界の陸地がどんどん海になり、陸上の水は減っていく。

>ニューオーリンズを襲った恐怖のハリケーンなど、最近の異常気象も、

>海水の温度上昇と無縁ではない。大気中に増える二酸化炭素(CO2)

>を何とか抑えなければ、地球の温暖化はやまず、やがて取り返しのつか

>ないことになる。

と書き出し、米国の元副大統領アル・ゴア氏が伝道師のように世界を歩き、地球の危機に警鐘を鳴らしている記録映画「不都合な真実」に触れている。

参考サイト：<http://www.futsugou.jp/>

私は政治家でないので余りなことは書けませんが、原因は「人間にあります」というテロップが印象的です。

国民よ、もっと、しっかりしなさい。

2007年1月 2日 (火曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

スズムシや親父なきとて今も啼く

◇ スズムシや親父なきとて今も啼く ねこ作。

秋になると実家の庭では鈴虫がなく。静かにふけゆく夜に透き通るようなその声は悲しく響く。

父は、幼少時に耳を患ったこともあってかなりの難聴だったが、スズムシが啼く風流をとても好んだ。耳を澄まして聴いていた姿が思い浮かぶ。

お風呂の追い焚きをするために焚き口に行き薪を放り込みながら、「湯かげんはどうやあ？」と尋ねてもまったく返事がないこともあったし、逆に、風呂から遠く離れた台所の片隅で何かを大声で誰かが話しても、風呂の中から「ええかげんやでえー」と返事をしていることがあった。

世界の中のあらゆる音が、私の半分にも満たないほどしか聞こえていなかったであろうに、虫の声や風の音を、繊細に感じ取ろうとしていたのだろう。それが磨かれたものであったのか、不可欠な感性だったのかは不明のままだ。

子どものころの我が家は、田舎づくりの旧家屋だったので、じめっとした裏庭は苔がむして、鈴虫の他にカエルやヘビも居たしウシガエルも啼いた。懐かしいことが次々と思い起こされてくる。

いや……スズムシが啼いているのを耳にしたので、親父がそこに居て耳を澄ましていた風景を思い出ただけである。「おい、コタツを出そうか」と言うているような気がしただけである。

2006年10月21日(土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#), [十七音のおと](#)

二人の田中氏

▽先日、葡萄を食べながら子どものころを思い出していたのですが、夏休みといえば家の前の畑で収穫した葡萄や桃、すいか、瓜、枇杷、とうもろこし、などが食べ放題でしたが、ところがその葡萄にしても桃にしても、いまどきに店で買ってくるものと比較すると各段にマズかったように思います。ほんの二十余年の間にすっかりと甘くなり、さらに美味しくなってしまったなと思うのです。

▽人々の暮らしも様変わりしました。良きモノ、悪きモノの盛衰をとやかく言うわけでもありませんが、いと儂きことであるなあと思いながら、甘くて美味しい葡萄をパクパクと食べていました。

▽いつの間にか、渋くて甘くもない果物を避けて、よりいっそう美味しいモノを求めるようになった現代人の心に間違いはないと思うものの、一種の麻薬のような誘惑がそこにはありまして、この麻薬のようなモノにしわじわとやられていつまわっているのではないのでしょうか。まあ、その結果、失ってゆくものがあるわけです。

▽二人の田中氏。まず、三重県議会議員だった田中氏の言葉から

- | 暴行事件については
- | 「力の強い者に果敢に挑戦するのが自分の信条だったが、
- | 言っていることとやっていることが乖離(かいり)していた」
- | と自嘲(じちょう)気味に振り返り、
- | 「4期連続当選し、会派の代表になり、
- | 若くして議長も経験したことで、
- | 人の意見を聞かないようになってしまっていた」。

▽もうひとりの田中氏について、朝日新聞の社説(8月8日)から

- | 田中氏の敗北 大人の知事になれずに
- | 長野県知事選で、3期目に挑んだ田中康夫氏(50)が敗れた。
- | ことし6月、「鳴りやまぬ『目覚まし時計』をもう止めましょう」
- | という意見広告が地元紙などに載った。
- | 6年前、作家の田中氏を知事選に担ぎ出した元銀行頭取が出した。
- | 「利権集団との長年の癒着を徹底的に断ち切ったのは見事」と、
- | 民主主義の目覚まし時計としての田中氏を評価しつつも、
- | 出直し選後は身勝手な言動が目立ち、改革も停滞したと批判した。
- | 当初の田中氏の取り組みは斬新だった。
- | だが、いかんせん、組織プレーができなかった。

▽ここで「力の強い者に果敢に挑戦するのが自分の信条だったが、言っていることとやっていることが乖離していた」という語録が残されたわけですが、ここでも諸行無常を感じるわけで、この言葉は我々の周りのあらゆるモノに一般論理として当てはまるような気がするのです。

▽彼も権力という麻薬に犯されてしまったひとりだったのではないのでしょうか。二人の田中氏。持ち味に深みがあり、社会を引っ張っていく牽引力、人物としての求心力も持ち合わせていると思います。甦って再び活躍する日を待つのか、はてまた、新しい時代の人に任せるのか。

群がる人、急ぐ人…

お茶が新芽を吹き出して、櫛るように緑が揺れる。今の季節は、郊外を走ると目に優しい風景が多く、茶畑もそのひとつで、機械的に整然と引かれた線ではなく、自然が織り成す直線と曲線がこれほどまでに見ている人の気持ちを和らげてくれるものなのかと、感心する。

社会の事象にしても同じことが言えて、理屈を通して理路整然としたものばかりが美しいのではなく、どちらでもない曖昧なものや優劣の論理などを抜きにして取り上げねばならないことというものがあるのだ。

自然体というものの奥深さとその大きさに改めて驚き、有り難味を感じながら、そよ風に吹かれていると、不自然の世界に戻るのが嫌になる。

5月には休日を連ねて旅に出ることが慣例だった昔は、この自然に自分を戻してやる作業が意外と大事だったのかもしれない。しかし、戻さねばならないほど病んでいることも望ましくないし、旅というものを癒しに利用しなくてはならない自分自身も情けなかった。

—— — — — —
お茶の畑のほかに、麦畑、れんげ畑も広がる。この土地に生まれ住めることに喜びを感じる。

蓮華の花を枕に戯れた子どもころは、それが本当に子どもたちの遊びだったし、「麦ふみ」という農作業労働に汗を流すことが生活の一部でありながら楽しいひとときでもあった。

今や、れんげ畑の中で駆けずり回る子どもの姿はどれだけ探しても見当たらない。水を張った田んぼで屈んで作業するのは年寄りばかりだ。「山村を走ってみても、こいのぼりが少なくなった…」と日記に書き続けて十年ほど過ぎる。

紀州道という自動車専用道路が開通して、山と山を繋ぐように大きな橋梁が架かっている。そのコンクリートの上に渋滞で動かなくなった自動車が点々と並ぶ。

人はどうして群がろうとするのだろう。排気ガスを出し、自然を踏みにじり、金をまき散らす。そういう社会現象は相乗的なもので、もはや止めようが無い。

人と同じ尺度で、同じステージに乗って、同じようにふるまうことを無意識に選択している。しかも、いつでも、急いでいる。

一体、何に怯えているのだろう。どこに向かって走ろうとしているのだろう。

見つめ直すことが必要なんだとわかっていながら、駆けている。それが、不思議だし、また歯痒い。

—— — — — — 【5月初旬号】

2006年5月 4日 (木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

なあ、父よ

よめはんが泣いてばかりいる。
子どもが京都に行ってしまうから寂しいのだ。

♪♪迷子の迷子の子猫ちゃんあなたのおうちはどこですか
おうちを聞いてもわからない名前を聞いてもわからない
にゃんにゃんにゃんにゃん泣いてばかりいる子猫ちゃん ♪♪

覚悟をしていたといえはそれまでだが、いざいなくなると、ひとりの部屋を静けさが襲うのだろう。
新聞をテーブルに置いて、ときに手が滑って皿を落として割ってしまったとしても、その反響音は部屋に響くことなく、大地で手のひらを打ったように時間に吸い込まれてゆくことだろう。

三十年前に私は家を出て東京にゆくと言い出した。東京のある大学にどうしても行く必要があるのだと私は父と母に言った。二人は、何もそれ以上を尋ねることはなかった。

母は、用事を見つけては荷物を送ってくれた。食い物や着物を箱に詰めて、都会でも簡単に手に入るものさえ詰めてくれてあった。そして、父からは、いつも、鉛筆書きの手紙が一枚あっただけだった。

「お金のことは心配なくていい、しっかり勉強しなさい」
と書いてあった。

私の母は、私が荷物ひとつだけもって、東京へと出かけていった日に泣いたのだろうか。
そんなことは、今やどうだっていいことかもしれない。
私ができることを今ごろになって気にかけていることが、おかしい。

犬のおまわりさんはさぞかし困ったことだろう。
私の父もあの晩、泣いたのだろうか。

新しい天地に踏み出す喜び。そんな感慨は簡単には得られない。
「その心を一生大事にしなさい」、と私は思う。父は、そう何度も顔きながら泣いたのだろうか。

なあ、父よ。

桃の節句に考える

政治学者のダグラス・ラミスの著作を回想して辻信一氏がこんなことを書いていました。

都心に雪が積もった日、彼(ラミス)とある言語学者は会話を交わしていた。ビルの窓から見ると、眼下の公園に職場へと向かう人たちの足跡がついている。定規で引かれたようにまっすぐだ。ラミスは言う。雪国で見る野生動物の足跡は必ず曲がっている。ウサギやネズミがあのようなまっすぐな足跡を残すのは、捕食者に追われているときだけだ。それを聞いた言語学者が呟く。「だったらあの人達を追いかけているのは何だろう」。(時、金、そしてメトロノーム)

3月3日は桃の節句。桃といえば子供のころにお伽噺で聞かされた「桃太郎」や三国志演義で有名な「桃園の誓い」などを思い浮べます。この物語の時代の人々は、きっと、「定規で引かれたようにまっすぐ」には歩かなかったのだらうな、と思いました。いえいえ、私たちが大切なものを見失ったのはそんな昔のことではなく、つい先ごろのことなのかもしれません。

「三重の環境」メルマガ2月号でも少し触れたのですが、「サクラサク」という電報がすっかり受験生の間から姿を消してしまいました。ひとつの節目には必ず花があり、その花の下でゆっくりとした時間に身を任せ果報を待つ。そんなスローな時代から、受験の合否は電報や速達ではなく、発表の掲示板を前にしている人のケータイ電話や電子メールからであったりする時代へと変化しました。

マネーや時間という麻薬のようなモノサシから少し目を逸らすことで、「環境」というキーワードの向こうに存在する違った世界が見えてくるような気がします。時代を超えて語り継がれてゆく、かけがえのない示唆のようなものが、そこに存在するのではないのでしょうか。

(娘、サクラ・マダ・サカズ なので、そんなにゆとりなど無いのですけど…)

――
きのうは、仕事のあとで、「ちょこっと日記」(割り当て)をアップして帰りました。

三日月が西の空低く、今にも落ちそうだ。
息は白くないけど、夜中はまだ寒し。

2006年3月 4日 (土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

鬼去りて柗照らす朝日かな

鬼去りて柗照らす朝日かな ねこさん

子どもの頃、母は式台から玄関で真剣に豆を撒いた。そしてをパシッ！ときつく戸を閉めて一息ついた。

鬼というモノを大のオトナが信用していたということはない。だが、外から魔物がやってくるということは、40年ほど前なら信じていたとしても不思議ではない。

災害、天災は自分の誠実な姿勢や並々ならぬ努力だけで回避できるとは限らない。昔の人はその途方に暮れるものに対して、真摯に生きるということで負けまいと念じたのだ。だから、こんな心や信念の持ちようを考えると科学の話混せてはいけない。

寒く辛い冬とまもなく別れを告げるのだという喜びと、春になったら頑張ろうという意気込み。その多くは「実り」を祈った切実なる期待だったのだろう。これから新しい季節を向かえ、我慢の節と分かれるのだ。だから「節分」なのだろうと思う。

社会は変動して、太巻き寿司の話題で持ちきりだ。如何にも飽食の時代に相応しいネタだといえよう。平和で安心して暮らせる今があるから、なのだ。

荒んだ社会をどのように立て直してゆくのか。私のチカラの及ぶところではないものの、鬼がいなくなった社会には怖いモノが存在しなくなったのも事実だ。

いつの世になっても人の心には「見えざる神」が必要だ。あらゆる角度から皆の心を見つめている。叱るわけでもない。声を出して注意をすることもない。そいつは「鬼」のようなものなのだ。

ほら、玄関から外をご覧ください。鬼が柗におびえて、家の中を遠巻きに伺っている。豆をまく文化に、人が人である人間味と真剣味を感じるのだが、豆まきは滞りなく終わったでしょうか。

心に、鬼を住まわせないさいな。 >多くの政治家さん、財界人よ

【雷山無言 立春篇】

2006年2月 4日(土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#), [十七音 のおと](#)

年の初めに考える(2)—文化力—

なるほどね。文化力ですか。社長。

eデモに関わって、様々なことを感じて、その発想の素晴らしさやコンセプトに間違いは無かったと確信しています。

そして最後に私の心にしこりのようになって焼きついたものは、「読書力」「文化力」が著しく欠乏していたんだ、この地には…ってことでした。

歴史上の昔はそうでもなく、様々な古典文化を生んでいる地であるのに、県民性が自己形成にまで及んで自らの内面から成長を破壊しているのですよ。

会議室は事実上の閉鎖。それはやむなし。「誰でも参加できる」…なんですが、「誰にでも参加をして欲しいとは限らない」のです。「文化力」の無い人と「読書力」の無い人がやってきたら、包丁の使い方も知らない人に包丁を持たせるようなものだったんですよ。自分も包丁を振り回そうとしたかもしれないんだが…。

文化というものは自分たちが作るのだと大声で叫んで生み出すものではなく、主流からはみ出した落ちこぼれの集まりやそれに似た精神を持った連中が、無意識に作り出したほうが味わい深いものになり、かつ普遍性をも備えることができる。

これは、【ねこさん】の独り言です。

彗星のようなヒト。表れないかな…

おっと、モロ、県民性を表出した発言で。

2006年1月 2日 (月曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

続・地球温暖化防止の話

ちょっとした努力で、それもいつかは当たり前のことになってきます。

第1話:http://bike-tourist.air-nifty.com/hiroka/2005/12/post_05ac.html

【まずは身近なところから】 10ポイント

- ・買い物袋は、エコバックなどを使う(レジ袋削減)
 - ・待機電力削減に努める(不要なコンセントは抜く)
 - ・暖房温度は19℃
 - ・断熱材を上手に使う(カーテン、雨戸の利用)
 - ・洗顔、歯磨きのときに水を出しっぱなしにしていませんか？
 - ・暖房便座はけっこう電気を食うんですよ。見直しませんか？
 - ・暖房便座のふたは、必ず閉める
 - ・ゆっくり走ろう、経済速度
 - ・空気圧は高めでいいよ、2.5kg/cm2くらいがオススメ
 - ・通勤のときなどに努めて歩こう
-

【みんなで努力をすれば、簡単にできます】 5ポイント

- ・お風呂のシャワーを見直そう(無駄に流さないでガス&電気の節約)
 - ・お風呂は続けて入ろう(夫婦は一緒に入ろう・ラブラブ)
 - ・無駄なテレビは消しましょう。時計代わりにしてませんか？
 - ・エアコンを控えよう、窓を開けてみよう
 - ・トランクなどに無駄な荷物を積んだままにしてませんか？
-

【工夫をすれば、できます】 5ポイント

- ・天気ポットや電子ジャーの保温はバカになりません。工夫を！
 - ・冷蔵庫の開け閉めを減らそう。詰めすぎも減らそう
 - ・電気をこまめに消しましょう。不要な電気はつけない
 - ・ちょっとそこまでお出かけのときの車は控えよう。自転車、徒歩で
 - ・車は乗り合いで使おう
-

いかがでした？

2005年12月29日(木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

男とオンナ

先日、ある人の日記にコメントを書いた。

それを読み返しながら全然コメントになっていないことを思い、しかしまたそれは自分へのコメントであるのだとも思った。

僕はおそらく、あなたの友だちの中で一番年が大きいかも。

30歳のときにできた子がもうすぐ大学生です。

その間に、いろんなことがありました。

救急車のお世話になるような事件もあったし、殺しあうような場面もあった。

別のオンナとそんなことになり、そんなこともあんなことあった。

ののしりあい、しかし、いたわりあうこともある。

今でもオンナのことが忘れられないことをよめはんは知り尽くし、古傷を舐めあう。

男と女を語れば、あなたと私じゃ経験も違うので、思うことも違うだろう。

しかし、一度じっくりと話を聞かせてもらえる時間が欲しいものだと思ったね。

世の中には善良な人物が溢れているわけでもないし、そのことに気づき始めるのが遅いくらい私はウブだった。

人に惚れるということ、愛するということに、並々ならぬ入れ込みを持つ私が、あなたの日記を読んでも、悲し涙を流さなかったのは何故だろうか。

天使が恋をおぼえたらただのオンナになるという♪（作詞：北山修）

天使に戻ろう、そう言ってみようと思ったのかもしれない。

寒波がやってきた。私の住む町に雪は積もらなかったが、少し北の町は雪景色の中だ。

雪の町に向かってゆく電車の中から、真っ白な雪をいただいた屋根を見てぼんやりしていた。真っ赤な朝日が昇ってくるのが見える。

もしもこの町のどこかに大好きな人が住んでいたら、私はどんな思いで電車に乗っているのだろう。

夕日が沈む赤と、朝日の赤は同じ赤なのに、何処が違うのか、人は見分けることができる。どうしてそんなことができるのだろうか。

電車のアナウンス。人の声。

そこには雑音がいっぱいあるのだけれど、私の頭の中は静寂に包まれ、遠い昔のひとつの物語を思い出していたのかもしれない。

2005年12月23日（金曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

地球温暖化防止の話

メルマガの編集後記に書いたことを、流用します。

.....

折りしもこのメルマガを編集に入った12月18日の早朝から日本列島を大寒波が襲っています。各地で積雪・低温による事故が相次いでいます。これも地球温暖化に起因しているのだという声も高いですね。巻頭にも書きましたが、ひとりひとりの心がけで必ず改善してゆける課題です。自信を持って自分で決めたアクションを実行してゆきたいものです。

さて、そこで質問をします。

◆ 地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！

先日、ふと見たテレビのクイズ番組で、限られた時間に答えを10個出すようなゲームをしていました。数人のグループに分かれて競い合っているのを見ながら、「地球温暖化防止のために身近で取り組めること、10個挙げよ！」っていう問題も面白いじゃないか、思った次第です。

俄かに繕って得た知識を競うクイズよりも、知恵を出しあいみんなで意識を向上するような発展的なクイズがあってもいいのではないか。はてまた、購買能力が高い二十歳代の視聴率を重視する今の時代、難しい注文なのでしょうか。

さて、このメルマガを読んで下さっている皆さんはスラスラと10個言えましたでしょうか？

.....

というわけで、何か思いつくこと、教えてくださいな。

2005年12月19日（月曜日）[【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

無言のゆびきり

先日、強風が吹きましたね。

眠れない夜。

「眠れない」と書いたあなたの日記を思い出していました。

■ 寒風が眠れぬ夜の窓揺する

眠れない夜を、ひとり過ごした受験生時代があったなあ。

あのころは、徹底的にひとりでした。

(ある人の日記へのコメントから)

寒い日が続きます。

師走。

駆け足で時間が過ぎる中で、どれだけ自分が自分を見失わずにおれるか。

泣く人もあり、笑う人もある。

■ 別れると知りつつ無言の指きりを

■ 猫だるま眉間にしわ寄せ襟立てる

コートは1年に1回。

忘年会の夜に着るだけですわ。

もうすぐ。

2005年12月 6日 (火曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

道草 —みちくさ—

◆ 雷山無言【12月初旬篇】

悲しいことに私の家は小学校と道ひとつ隔てているだけなので、学校帰りに道草をしたり友だちと鬼ごっこやしりとりをしながら帰ることなど一度もなかった。だから、道草をしながら帰ることのできる友だちを羨ましいと思ったことが何度もあった。

元来、子どもというものは、友だちと仲良く遊んでいる時間に、感受性や思いやり、協調性などが育つのだと思う。家庭に戻って親という有無を言わせないカリスマによって暗示された視点は、子どもたち相互の社会の刺激で鍛えられ、再び家庭に戻って優しく包まれ心の中に確定されてゆくのだとするならば、たとえそれが弱々しく不安定なものたちばかりの集まりであっても、子ども社会は子ども心を熟成させてくれる醸造樽のようなものだったのだ。

ところが、受験を術と捉えた親たちが、バーゲンの一番乗りのように我先に子どもに前倒し教育をし始めてしまった。その結果、学習塾が繁盛し、子どもから夕飯前の草野球、またはゴム跳び、石蹴りなどの遊びを奪い取ってしまう。あたかも親のいうことをよく聞く優等生が、金太郎飴の如く生まれた時代がやってきたのだった。

やがて、外で遊ぶ子どもが減るだけでなく、下校時間に遊びながら帰る子どもの姿も見かけなくなった。道草を食いながら帰ると塾に間に合わないからだろう。IT技術の進化に伴ない学習塾が規格化され、子どもたちはケータイ電話をもたされ、時間や居場所を管理される時代となっている。姿を消した子どもたちは子どもたちは、もはや近所に戻ってくることはない。

何とかならないものかと思っている矢先に、小学児童殺害の事件である。「道草」という言葉が子どもたちに忘れられていってしまう。

———
道草。いい言葉ですね。大人の社会でも、結果追求主義が蔓延っています。

でも、私は、過程を大事にしたいタイプです。難問を与えたときに、深い森を彷徨うようにその思考過程が纏れていても、その質がよければ合格とする。そういうホンモノ志向の太っ腹な親分に出会いたい。

2005年12月 1日 (木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

読書力のこと

「本当に馬鹿よ。あんな玉ねぎのために一生を棒にふって。あなたが玉ねぎの真似をしたからって、この憎しみとエゴイズムしかない世のなかが変わる筈はないじゃないの。あなたはあっちこちで追い出され、揚句の果て、首を折って、死人の担架で運ばれて。あなたは結局は無力だったじゃないの」

遠藤周作は晩年の著作「深い河」でこのような言葉でテーマを考察している。様々な言葉の中で、非常に含蓄の深い言葉だと思う。

eデモクラシーは、何を果たそうとしたのか。

それを考えるときに私はひとつの大きな事実にあふつかる。あまりにも当たり前なことだったのだが、ある意味では新鮮なことだった。

(続く／追記してゆくか、連載にするかは現在では不明)

2005年11月 3日 (木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

明かりなき奥座敷まで照らす満月

さて、月を眺めて何を飲もうか

8月19日に満月をみて[こう書いた](#)。

まだ夏の暑さが強かったころだ。

果たしてほんとうに秋は来るのだろうか、とさえ思いたくなったものだ。

明かりに貴重な油を使っていた昔は、この明かるさに感謝をして火を消し、これを堪能したことであろうと想像すると、現代人は何とも情けなく驕りに満ちた暮らしをしていることか。

明かりなき奥座敷まで照らす満月　ねこ作

※[雑文](#)

2005年9月18日（日曜日）[【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#), [十七音のおと](#)

彼岸花咲いたと父に手紙書き

きのう俳句部に…

彼岸花咲いたと父に手紙書き ねこ作

と書いたのですが、実際に父にそんな手紙を出したことはありませんでした。

山栗がダンボールの箱にいっぱい贈られてきたことはありましたが。

「金は送った。勉強しろよ」

と書かれていた。

[ミクシー 俳句部](#) 募集中！

2005年9月17日(土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#), [十七音のおと](#)

引き潮

市街地を抜けて隣町へと差し掛かるところに小さな橋が架かっている。海から二つ目の端で、潮の満ち欠けがよくわかる。私はここを朝の7時ごろに通るのが日課だ。

満月の朝は潮が満ち、川の流が止まって、ここにもし橋がなければもう立派な海の一部となるのだけれど、昨日の朝は引き潮で川の地肌が丸ごと姿を見せていた。

引き潮を見るたび、私は思う。

ああ、この川の姿は何か似ているではないか。そう、失恋をして涙も枯れ果て、投げるものも壊すものも棄てるものもなくなってしまった女が、大きいため息をついている姿のようではないか。

エネルギーこそ使い果たしているけれど、決して潜在的な力を棄てているわけでもなく、大きな海を目の前にもう一度、甦ることを決意しているしたたかな女の姿を思い浮かべるのだ。

静かなのだ。

潮の満ち欠けが止まって、これから次の大きな変化が起こる前触れを私は知っているだけに、そこにとどまり、大きな干潟と対峙していただく。

――

昨日の朝――頭の中のすべてが真っ白になっている時刻――恥ずかしいほどにあらわに姿を見せた干潟に向かって、明日は少し明後日はさらに少しと潮が満ちてくる。

私は引き潮の海が好きだ。そういいながらも、静寂のあとにゾクゾクする海のざわめきを期待しているのかも知れない。

朝に引き潮を見たのだから、夕方に見る月は半月だ。そいつが昨日より少し太っている。真っ二つに切った月がほんの少しふくよかになってきているのだ。半月が丸くなる。

引き潮に女のため息を感じ、丸みを帯び始める半月に擦り寄る女の魅惑を感じている昨今。

8月号 メルマガの巻頭言と後記

【巻頭】

立秋を過ぎて少し暑さが和らいだように感じます。でも、まだまだ暑い日となることもあり、暑さ対策への油断は禁物です。夏休みも終盤にさしかかりますが、自然の中での遊びも十分に注意をして事故のないように心がけてくださいね。

夕立が洗つていつた茄子をもぐ 種田山頭火
お盆が明けて連日のように雷雨に見舞われました。そんな折、山頭火の自然を見つめた句にハッとさせられます。自然に逆らわないで自然と共に暮らす。インタープリター講座では、参加者のみなさんに一句ひねってもらうこともあります。ちょうど「木の一句」の募集も始まりました。

環境を考えながら一句、いかがでしょうか。

(略)

【後記】

県内では稲刈りが始まりました。ふた昔ほど前ですともう少し刈り入れ時期が遅く、農作業の終わった田んぼにはたくさんの赤とんぼが飛んでいました。「秋の田の刈穂の庵の苫をあらみわが衣手は露にぬれつつ」(百人一首)と天智天皇が詠んだ時代は、夜露が付着するほど冷え込むことから、さらに晩秋だったということになります。

さて、先月の後記で少し触れました「そしてウンコは空のかなたへ」[出版社:金曜日]を読みました。タイトルの意味は、メルマガ読者のみなさんのご想像どおりのことと思います。

この本は全部で15章から成っています。産業廃棄物が実際に私たちの知らないところでのどのように処理をされてゆくのかを追っています。狂牛病で有名になった肉骨粉、スーパーから出る食品廃棄物、ペットの死骸、献血された血液、携帯電話などなど、面白い話題が取り上げられています。

そして、第15章で日本一の糞尿生産地、東京都の下水処理事情をルポルタージュしています。ウンコが燃やされて「空のかなたへ」消えてゆく話で締めくくっています。

ちょっと結論としての押しがアマイようにも思えますが、リサイクルだけではなく、ゴミを出さない工夫を提言しようとしています。(…とりたい。)

本書は、あの「買ってはいけない」(←私は著者のサインも貰いました)で有名になった「週刊・金曜日」に連載されたルポです。それだけにもう少し辛口でも良かったと感じるわけです。

みなさんも興味のある方はどうぞご覧ください。(環境学習情報センターに蔵書があります)

【8月号:22日配布】

2005年8月22日(月曜日) [【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

「喫茶・コリン」の提案

私は、ハンドルネームを昔から「猫柳」「猫柳素庵」としています。だから、友だちはねこさんと呼びます。そこでmixiではねこさんなのです。

(ときどき「六角堂」とか「百万遍」などと名乗ることがあります。少し変人な人間になろうとするときには「六角堂」であったりします。)

ネットでは友達と呼べる人ができて、時期が来て廃れていってしまうとそのまま音信も途絶えることが過去には数多くありました。その原因が本名を扱わないことに拠るのかどうかは断言できないものの、助長していることは否めません。しかし一方で、ハンドル名ではなく本名を名乗り、ときには顔を見せればコミュニケーションが円滑にさらに深くできるのかというところでもないと思うのです。その大きな原因は、コミュニケーションボードの構造に大きく起因していると考えられます。

その一番大きな特徴は、日記サイトで顕著に見ることができます。主宰者はまずメッセージを提起します。それに対してコメントを書く人が数々現れます。ここでコメントを書く人は、主宰者のサイトを自分の意思で訪問しなければなりません。そこで主宰者と何らかの共有を持ちコメントーターになってゆくのです。

やがて、コメントを書く人が2人、3人と増えることとなります。しかし、そこに来るコメントーター同士ではコメントを交わすことをあまりしません。それは日記サイトが主宰者の持ち物であるからという大きな理由があるものの、お隣さんに居るコメントーターはある意味で無関係であり無関心だからです。また、最上の主催者が増えるとその数だけ巡回をしなくてはならなくなることも構造的な欠陥といえるかもしれません。

この点がネットのコミュニケーションでの一歩突っ込んだ関係を阻んでいるのだ、と確信を持っています。

この話を突き詰めてゆくと、日記サイトのような構造では「1対多」(主宰者:客人)のコミュニケーションしかできず、多対多(主催者を含めた客人同志の相互交流)ができないこととなります。

そこで、私が申し上げたいのは、なるべくなら共通のエリアに、同じ意思のある人が集まってきて談話・意見交換をするというのが望ましいということです。

しかしながら、メディア社会の流行は決してこれに賛同しているわけではなく、ますます日記サイトが大流行で、「自分の」日記のところにたくさんの方が集まってくるのを楽しんでいる。(そのことは何ら間違いでもないし、悪くもないのですよ) 何だか会社組織の縦割り構造を見ているようにも思えます。

そこで当然のように湧き上がってくるのが、横串を刺したコミュニケーション構造の提案です。私が作っている「俳句部」「読書系」「ひとり旅」(何れもmixi)などが、それに近いわけです。ただ、このコミュニケーション・コミュニティも今ではよく似たモノがたくさんあって選ぶのに困ってしまいます。どれにも属さない話を書き込めるところも、上手には探せませんしね。

おうちの片付けをしても、完璧に片付けるのは難しい、仕事で資料を分類しても、やはり完璧は難しい。そこで、いわゆるハキダメ(掃き溜め)のような所が必要なことがわかってきて、広義に私は冗長性(Redundancy)のようなものと解釈しています。通信情報工学を専門としている人には基礎過程で嫌というほど叩き込まれる確率理論と情報理論が登場します。(すみません。つまらない話に行ってしまいました。)

つまり、コミュニケーション・コミュニティにも冗長性(Redundancy)を持たせようじゃないかってことで、フリートーク・コミュニティ(いろんな話をするところ)を作ってみようかな……と考えたりしてます。名前は決めていまして「喫茶・コリン」といいます。神経伝達物質のアセチルコリンからいただきます。さて、……と。

雷山無言 8月中旬号

2005年8月15日(月曜日) [【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

7月の編集後記

九州、四国地方から梅雨明けのニュースが届いてきます。このメルマガがみなさまのお手元に届くころには、わが地方も梅雨が明け、ギラギラと太陽が照りつく本格的な夏の日差しが戻っていることでしょう。

山一つ動かしそうな蝉時雨 (喜多嶋静子・四日市市)

「俳句のくに・三重」でこんな入選句を見つけました。大きなスケールで自然を見つめているいい句ですね。(ちなみに今年「木の一句」を募集しています。)

7月になってクマゼミも鳴き始めました。子どもたちの歓声がプールに響き、夏休みに突入して親子で自然の中に飛び出す機会もだんだんと増えてきます。安全に楽しく遊びながら、自然を満喫してくださいね。センターの夏休み講座にもお越しくださいね。

(中略)

そうですねえ。オススメ本というか、面白そうな本があります。平田剛士著「そしてウンコは空のかなたへ」。愉快的タイトルですね。「買ってはいけない」でお馴染みの金曜日発行です。廃棄物が私たちの手を離れたあと、いったいどのように処理されてゆくのだろうか。そんなことを追いかけています。(詳しくは筆者もこれから読みます。)

熊谷達也著「邂逅の森」と「相剋の森」を読みました。

前者は、東北地方でマタギとして生きた青年の人生を描きます。自然と共に、熊と共に生きてゆくひとりの青年の物語です。直木賞。後者は、ツキノワグマの棲む森の自然と共に生きている人間たち、そして主人公の女性ライターが、自然とはいったい何なのか、保護をするとは、共生とは何かを考え続けます。ちょっとイデオロギーな話あり、ドラマありといった素晴らしい作品です。

「邂逅の森」は大正時代、「相剋の森」は現代を舞台に、環境問題や自然保護、狩猟という文化と対峙する様々な人々の視点を踏まえ、私たちが直面する環境保護という素材を取り上げた凄みのある小説です。どちらも小説ですが、自然と調和して生きるには大いなる畏敬がそこにあることを暗示している秀作です。(こちらの2冊は図書コーナーにはありません。)

ナツイチ。まだお決めでない方にオススメです。

2005年7月19日(火曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

青ガエルおまえもそこで雨宿り

遠い昔の話。

そのころは銭湯通いで、大学生といえば長い髪に下駄履き。(理系なのに)講義にはちっとも行かず、母校の前の古本屋街を散策して数冊の本を抱きかかえて下宿に帰って来る毎日。風呂屋にも洗濯にも殆ど出かけないで四畳半に寝転がって本を読む。音楽は一日中、ラジオから流れていたなあ。

そんな折、

気まぐれにお風呂屋に行こうと思い銭湯の用意をして部屋を出ようとする激しい土砂降りになったので傘を持って出直した。きっと暑い日だったんだろうな。エアコンなんて当然無いのが当たり前前の時代です。

路地を幾つか過ぎて表通りへ出ると電気屋の軒先で雨宿りをしている一人の女学生を見かけた。一旦はそのまま通り過ぎたものの駆けて戻って「銭湯へ行くのですが途中まで入っていきますか」と傘を差しかけた。

曲がり角をひとつ右に折れ銭湯の前まで来たときには雨は殆どあがりかけ。「もうすぐそこですから」と礼を言い彼女はそそくさと駆けて行った。

2005年7月 2日 (土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [十七音のおと](#)

薫風の五月に

「「「「「 三重の環境 平成17年5月16日発行 メルマガ 「「「「「

◆ 巻頭言

風薫る五月となりました。御在所岳でアカヤシオの花が咲いたという便りが届いて来ると堰を切ったように次々と花の便りが舞い込んできます。

自然とのふれあいをモチーフにした三重の環境・トップページの投稿写真にも次々とみなさんの力作が寄せられています。どうぞ、ご覧ください。

また、ライブカメラが設置されている「青山高原」の風景には、初夏の風を受けて力強く回る風力発電施設、そして五月下旬にはたくさんのツツジが咲き誇る様子がカメラを通して少し伺えると思います。

種田山頭火が、「けふもいちにち風をあるいてきた」と詠んでいます。青田が日々色濃くなる季節に山頭火は行乞途上にありました。自然のなかを歩き続けている姿がこの句からうかがえます。句集ではこの作品のあとに、「ほうたるこいこいふるさとにきた」とも詠んでいます。

このメルマガが届いて一週間もすると県内各地のとおきおきの場所でホテルが舞い始めることだろうと思います。

◆ 編集後記

常一さんと聞けば誰を思い浮かべるでしょうか？ 宮本常一さんと西岡常一さんの二人を思い浮かべる方々も多いと思います。今回は、西岡常一さんの語録をお借りします。

西岡さんは、法隆寺金堂の大修理、法輪寺三重塔、薬師寺金堂や西塔などの復元を果たした宮大工棟梁として有名です。

語録に

「わたしどもは木のクセのことを木の心やと言うとります。風をよけて、こっちへねじろうとしているのが、神経はないけど、心があるということですな。」

「木のクセを見抜いてうまく組まなくてはなりません、木のクセをうまく組むためには人の心を組まなあきません。」

「あなたが今造っているものが、五十年もたったらその町の文化になる。そういうものを造らなければいけない。」

「どの木にもそれぞれ癖があり、右や左にねじれようとする。右にねじれた木は、左にねじれたあの木とくみあわせたい。何百年後の木の性質と相談しながら、それぞれの癖を見抜いて使ってあげたい……。」

（堂塔を建てる際には）「木は山ごと買って、その山の南に生えていた木を南側に使い、北の木は北に使い、西の木は西に、東の木は東に使い」

などがあります。

環境活動を実践する我々にも共通するずっしりと重い言葉に揺るぎないものを感じます。

※ 環境学習情報センターの展示コーナーには環境に関する図書が約2,500冊あり、閲覧できるようになっています。その中に、西岡常一さんの「木に学ぶ」という本があります。

2005年5月21日（土曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

蛇莓

ふるさとの沼のにほひや蛇莓 水原秋桜子

早朝に少しウォーキングに出た。
再開したわけですが、多分三日坊主だろうな。

活字を書いているか、読んでいるか、通勤してるか、寝てるか、食事をしているか。

そんな日常の中に居ますので、歩いている1時間は頗る貴重で贅沢な時間です。
でも、様々なことが頭のなかを巡ります。

すべての鳥の名前と、すべての草木の名前を知っていたら、森を歩いている、それは宝石箱の中を歩いているような気持ちになれるのだらうと思います。少しずつ覚えよう。

【銀マド】書きました。

2005年5月 1日（日曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

4月号 メルマガ巻頭言＋後記から

4月18日発行のメルマガ巻頭言＋後記から

◆ 巻頭言

4月になりました。新しい組織、新しい学年での生活が始まっていることでしょう。毎年センターにやって来るツバメさん、今年は4月13日にやって来ました。

一方、咲き始めるのが遅くてヤキモキしたソメイヨシノですが、今では散りそめとなりました。花のあとから新芽が吹き出しています。

鈴鹿山麓にあります三重県環境学習情報センター周辺でも春が真っ盛りです。今日これを書いているのは16日ですが、今朝、国道沿いの水田で水を張った田んぼで田植えを始める姿を見かけました。

◆ 編集後記

このメルマガの冒頭で田植えの風景を見かけたと書きましたが、「田一枚植て立去る柳かな」と芭蕉は詠んでいまして、ちょうどその句を思い浮かべました。「月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人也。」で始まる「奥の細道」の旅へと、芭蕉が深川の住まいを出発したのは旧暦の3月末のことで、殺生石・遊行柳のあたりに辿り着くのがちょうど4月の20日ごろでした。今ならば6月初旬になりましょうか。

田植えの風景を道路から眺めて佇む余裕はありませんので、車を走らせてセンターまでやってきましたが、芭蕉のようにゆっくりと立ち止まって眺めることもなければ、大勢の人々が総出で田を植える姿も現代では見かけることもありません。

人々の暮らしやそれを取り巻く環境は、極めてスローな足取りで変化をしてきました。私たちの自然に対する取り組みも、このスローな足取りを真似してじっくりとやってゆかねばならないのでしょうか。

2005年4月18日（月曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

戦略というもの

戦略というものを打ち立てることが重要だ。まず目標を明確にし、達成の手段を考察する。手段を吟味し工程と根拠を構築してゆく。

ひとつの提案をクローズドな会議室に提案した。クイックアクションで動いていただいた。非常に評価できるアクションだ。しかし、戦術が正しくなかった。伝書鳩のように御使いをするだけになってしまったように見えるのだ。これでは新しいものを創出することなどできないだろう。

あとになってじわっと浮かんでくることがある。それを整理できずにいる。

同じ目標を持って挑んでゆく気ならば、それが本気で真剣ならばあんな愚かな行動には走らないはずだ。結婚させてもらえない頑固オヤジを崩すときに作戦を立てるのと同じじゃないかと思うのだが。。<ほんとうに改革する気あるのかい？>と問いたくなる。<そんな折衝手法で事業を動かせるの？>と苛立ちが募る。

提案の主旨は何なのか、考えてみるべきだ。そのまま持ち込んでも受け入れられるわけがないことくらいは赤ん坊でも分かる、と私は思っていた。今回、伝書鳩をしてくださった人は、その赤子の気持ちになれなかったのであろう。正直に掛け合ってくださいありがたいのだが、先天的な素質なのか。そこで、すべてが終わってしまう。

答えをいくつか想定していた。<折衝に行くまでも無く、そんなことは無理でしょう>と答えてくれたら普通だ。<公平性に欠けるから無理でしょう>、でも良かった。

しかしねえ、提案者(私)はそんなことを百も承知で言ったのだから、やや優等生の答えなら<何か手段を練りましょう>とかなどもあるかもしれない。

知恵を絞って物事を打開してゆきたいという本能のようなモノを人は持っている、と感ずることがある。だから、無理を可能にする手立てや、譲渡してもいいから目標の一部分だけでも達成するにはどうするのがいいか、を考えようとする。したがって、明らかな結果が見えているのに失敗へと導くアクションは自殺行為、あるいは破壊行為としか思えない。少なくとも私にはそう見える。

だから、私はそこで打つ手立てをなくしてしまった。

どうやら、前例をぶち破るとか、打ち崩すとか、最低でも土台を揺るがすような刺激を発するとか、そういう発想は無いらしい。

どうしたもんだらうか。そういう頭脳の人を排し、柔軟でクイックに、あるときは慎重に、戦略を練ることのできる人たちを集積したいのだが、世の中は自分の考えるようには進んでくれない。いわゆる「水モノ」なのだ。目覚めよ、器のある人たち。自覚して集って欲しい。

もっとも、こんな所で愚痴っけてもしかたがない。結果的に伝書鳩の集まった小屋にメッセージを入れた私には、更に戦略が欠如していたのだとも言えようが。

(もう、何も書かん、やめ！)

初心

新年度・新学期ということで職場に新鮮な風が吹いている。出会い、新鮮、嬉しい、出発。。。新しい人々と新しい組織で活動を始めるときは足取りも軽くなる。

新しく名前を覚えねばならない人が4人できました。もう少ししたらまた2人増える予定で、去年からの古株さんは全11人中私を含めて5人ですので、過半数の議決権を超えることになりましたな、なんていうジョーダンも飛び出している。

男は3人で肩身が狭いとまでは言わないものの、言葉には気をつけなければ。。。既にイエローカードが2枚は出た私。「初心忘るべからず」と肝に銘じよう。

数々の修羅を旅してここまでやってきたのですが、二十四歳のころは新鮮でした。現在、[防衛医学研究センター](#)長である菊地先生が三十五歳くらいで新米教授、関谷先生も若かった、[荒井先生](#)も新米で二十八歳、[二川さん](#)も同い年だから博士課程の一年でした。

みなさん、「こら！オマエ、こんなヘマやって、しかたがないなあ」と叱ってくれる人たちでした。荒井先生には、年季の入ったアルファロメオに学生を4人も乗せていつも駅まで送っていただきました。「キミたちが未来を創るんだからね」と激を飛ばしてくださいましたし、お叱りも受けました。二川さんは家が近かったので浦所バイパスをスバルに乗せてもらって帰ったことが何度もありました。

そのときのように私に苦言を下さる人が年々少なくなってゆきます。それは私がオトナになって自分でモノを考えるべき所にいるからでしょう。しかし、それに甘えてやりたい放題をやっているんじゃない、と少しは反省しなくてはいけないんだな・・・と、新学期を迎える人たちのメッセージを読んでいて自戒しています。

「お父さんも亡くなってしまったし、ちょいとは誰かの言うことを聞かなあかん」といううちのんの言葉は、節目節目に結構重く押し掛かってきます。

この人の忠言なら理屈抜きで聞くという人、あなたにはいますか？

2005年4月 3日（日曜日）[【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

別れる〔雷山無言三月末号〕

様々な形でお別れや出会いがやって来る。確かに、1年前に既に想像できたことであっても、いざ別れるとなると寂しい。卒業や就職の季節。この時期に、仲良くなった友達とお別れした人も多いと思う。時間が流れる節目節目に思い出は詰まってゆくのだ。

旅先で出会った人と別れるのも、とても苦い苦いモノがある。幾日か旅を共にして、旅が終わるとそれぞれの現実に戻ってゆくのです。11年前の旅もそうだったなあ。もちろん他にいくつもあったけど。。。

別れは出会いと背中合わせってことはちゃんとわかっているのですが辛いんですよね。私は泣き虫なので、オロオロと涙を拭いてしまいます。

ある人が、あるところで、[日記](#)に

「アンパンマンは修了式の朝、子どもが来る前に黒板に書いた絵。何だか消しづらくて未だにこのままにしています。」と書いていた。先生なんですね。子どもたちとの思い出が一杯詰まった教室を去るのでしょうか。

でもね、感動の歓びだけでなくあらゆる喜怒哀楽を大事に記録に残すことは必要なんでしょうけれども、時間がどんどん流れてゆくなかで新しいものを受け入れながら昔とブレンドして更に新しいものを作ってゆくということも大事ですよ。

別れるということは、「離れ離れになってしまうこと」でもあるのですが、忘れてしまうことじゃないし、消してしまうことでもない。そう思うようにしています。

勸酒

勸君金屈卮
満酌不須辞
花発多風雨
人生別離足

この杯を受けてくれ
どうぞなみなみ注がしておくれ
花に嵐のたとへもあるぞ
さよならだけが人生だ
【井伏鱒二訳】

—

〔[TB先](#)〕

情報発信 & コミュニケーション

来年度は

- ・情報発信
- ・ソーシャルネットワーク
- ・地域コミュニケーション

などをキーワードにして、仕事のプランを立てようと思う。

受け入れられたら、本腰入れる。

(残念な結果になったらPC棄てて娑婆に戻る)

知恵を刺激する話や書籍 & WEB情報をください > 関係者の皆さん

2005年2月10日 (木曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

自分を覗く

髭を剃らずに、見かけ不精のまま年を越した。もう一度、実は昔のように伸ばしてみるかなと思案中なのです。

その昔、天皇陛下の息子宮様のように髭を生やしていたのです。(似てるとベンチャラをいってくれる人もあったほど)しかし、古い体質の職場でしたので「威張っている」「生意気」などと陰口を叩かれたものです。おまけに、「就業規則に生やしていいと書いてあるのか」とか「髭を剃って来い」とまで怒鳴り散らした上司がいました。気に入らないことがあって私に怒り散らすときは口癖のようにそう言いました。

目に見えないチカラに引きづられて会社の中で人々はバランスを保っていました。そういう窮屈が嫌いでしたので、個人の顔に付いているモノにとやかく言われたくないし、私はしばらくは髭を生やしたままでいました。

同僚は髭を生やしている私に向かって、「卑下してるの？」というようなホンネ含みのジョーダンを言いました。そう言っていた彼も見えないチカラに縛られていた1人でした。

人権問題として何処かで闘えぬものかとさえ思ったこともありましたが、愚かしい人の相手をするのも嫌なので、しばらくして剃り落としてしまいました。

髪が薄くなったのに髭が茫々と生えているのも恥ずかしい気がしたのと、何よりも髭に白いモノが混じり始めたのがひとつの決意でした。

どうして今また再び髭を生やそうと思うのか。

わかってもらえないかもしれませんが、茫々と生えた髭を撫でていると悩んでいるときに答えが生まれてくるんですよ。それと、もうひとつ、(電気かみそりですと鏡もろくに見ないで剃れますが)、もしも伸ばせば毎朝、鏡を見なくてはなりません。自分の顔を1日1回くらいじっくり見ようかなと思った次第です。

でも、髭を生やした人は、やはり、あまり好まれないようですね。いかがでしょうか。

2005年1月 3日 (月曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

起死回生。

二冊の本を手にした。

去年の「災」を払拭し、
私自身も立ち上がらねばなるまい。

司馬遷のこの本を読み、
心震えあがらせた時期を
自らが思い出さねばならない。

2005年は日の出から始まるのではない。
今、この気概を抱いたときから始まるのだ。

2004年12月31日（金曜日）【銀マド・名作選】、【雷山無言】

信管

会社を辞めて3度目の冬を迎えている。

2004年12月23日（木曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

新・雷山無言 を始めます

静寂な峠で
稲光と轟音に出遭う
しかしその凄まじさにも
森は泰然と動じず
樹々はひとときを沈着に過ごす
雷山無言
冷静になれと山がいう
――

実質上、断筆となっていました雷山無言を再開します。

カテゴリは【新・雷山無言】としました。

2004年12月 4日 (土曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

ひとつの道

2001年11月6日の朝日新聞朝刊(名古屋本社)の2面に「従業員は家族。首は切れん」という松下幸之助の語録を引用して、松下電器グループが人員を整理しているという記事を載せている。

10年前に京都市にあるオ社研究所からM社に私は転職をした。入社と同時に生まれ故郷のある部品事業部門へと転勤となり、ここで電源ユニットを設計する部門に配属される。

M社では「人材」は「人財」と書くのだと、かつて上司から私は聞かされた。人を活かし個性を伸ばして事業を発展させ社会に貢献するのだ。そう教えられた。

M社のその事業部門は、トランス事業や変成器事業も同じ事業体が行っていた。決して一流のものではないが三流でもなかった。

ここではチーム制と呼ばれるユニットがあった。そのユニットは、設計部門から製造部門まで一連をひとつのチームと捉えて考える、M社の独自のやり方だとそのときの私の上司は説明した。これが私の住む田舎に集結していた。ゲーム機器、携帯電話機、エアコン、ファックスなどの電源の生産を担い、その生産台数も多かった。大量生産が出来る能力のある製造業が力を誇示し、数百億の事業体だった。

1台あたり2千円で出荷する電源でも月産5万台を生産したら1億円になる。利益率を2割しか確保できなくても2千万円の利益になる。このような電源ユニットを20種類設計して生産に持ち込めば月に20億円、年間で240億円になる。数百人から千数百人ほど人を雇用できる生産高である。

そのチームに設計者が約200人程度いる。実際に電源設計携わるのは1人1~3テーマで数ヶ月あるから、200人もの設計者がいたら、計算上では240億円の何倍かの売上も期待できることになる。その余裕分であろうか、世間に不況の風が吹き出したころも、海外生産でローコストの商品が国内の生産工場を脅かし始めても、製造力や設計対応力を駆使して売上高を確保し、電源業界のシェアも確保してきた。

しかし…売上高が240億円から100億円まで、1年2年という間に一気に落ち込んだ。コストが10分の1以下で生産できる中国での製造体制に対して、国内工場は早々に縮小を決めた。

会社は、「事業改革、業務改善、自己改革…をして」と社員を叱咤するが、風通しが悪く融通の利かない体制には焼け石に水である。いったん自分の身を切ってから建て直さねば方法が無い状況である。

2004年5月 5日 (水曜日) [【銀マド・名作選】](#), [【雷山無言】](#)

前略、ご無沙汰 Mさんへの手紙

手紙はこんなふうには書き出している。

—

前略、ご無沙汰

ねこです。前略、ご無沙汰してます。はやいもので、もう六月になりました。

今頃には、お手紙を書いております。何やかんやとあって1年と2ヶ月が過ぎました。辞めてしばらくはどうなることやらと相当に悩みました。履歴書を50通以上出しました。まあでも、生きています。西山さんから、相当に非情である意味では卑劣な方法で私に早期退職を迫られましたので、会社も職場の恨んでいましたが、そのお礼は違う形で実現したい。

※卑劣という言葉は曖昧ですが、非常にわかりやすい例で申し上げますと「君には愛人がいるだろう。それを家族に告げるよ。コレが困るなら何もなかったように会社を辞めなさい。」というようなやり方です。実際に私にはそんな後ろめたさはないですが、愛人という部分を、「家族にも同僚にも友人にも打ち明けられないような[打ち明けてもわかってもらえないような]ことだった」と思ってください。それをネタにして、個人攻撃的に退職を諭されましたからね。

しかし、今は個人を憎むよりも、そうさせた会社の一面があるとことが大事なんです。会社とは愚かな組織なんだということを身近な人たちに伝えるのがいまの私の使命です。

職場を変わり、行政の世界にいます。私自身の人間味が変わりつつあると思っています。

家族や親族からは、よく思われていませんが、私にとっては聖職であり天職と思っています。そのことを、信頼でき尊敬している人生の師匠なる人に、その気持ちを伝えたかったのだから、この手紙を書き始めた。

—

そんなふうには終わっていません。

Mさんへのメールもありました。

—

前略、ご無沙汰してます。はやいもので、もう六月になりました。お元気でお過ごしですか?黄金週間があけたら一度お手紙を出そうと考えていたのに、それが、一日伸び、二日伸びて、あつという間に初夏となりました。「光陰矢のごとし」とは、まさにこのことですね。

さて、四月二十九日に我が家のパソコンが突然動作不能となりました。日常から如何に電子メディアに頼っているのかを、去年の夏のクラッシュ事件で嫌というほど味わいながら。再び、味わいました。たった一年であの苦渋を忘れたのか!と叱られそうです。

しかしちょうどバックアップ機を購入してゆく予定もあったため、計画の修正はあったものの、急遽新しいパソコンがやってくることになりました。時期、切迫の中ではフルに自作というわけにゆかず、セミフランチाइズというか……。

パソコン工房のオリジナルバージョンに少しアレンジをしたものとなりました。十年以上前のVTRも編集できるものとなりました。

パソコンが修理に出ていたのは3週間で、その間に少しずつ新機種を設定して、かなり落ち着いてきたし、キリのいいところでお手紙を書いてみようと思ひ立ちました。

HPの更新は、放り出したままで定期連載ものは中断中ですが、昔からライターをしていたIMFのメルマガが復刊していきますので、またあれこれと書き綴る時間を増やしてゆこうと考えています。

仕事のほうは、まずまず、軌道に乗り始めました。

健康に関して。大腸にあったポリープも三ミリのまま大事に残っています。悪性化することない模様です。皆さんもカメラの検診をなさることをお勧めします。月並みな便りですが、そんな感じです。〔記:六月七日朝〕

ポリープ



私は、いい経験ができて少し楽になってきているが、使命を忘れてはいけないのだということをこの手紙で書きたかったのだろう。

2003年6月20日（金曜日）[【銀マド・名作選】](#)、[【雷山無言】](#)

首輪のついた犬たち・その3

《首輪のついた犬たち・その3》

【アルバイト】 【規則】 【お茶くみ】 【静か】 【ぐれる】 【信頼する】 【懲らしめる】 【自由】 【やはり】
【スパインアウト】

久々にペンを取ります。忘れないうちにできるだけ書き留めておこう。

【アルバイト】

10月からアルバイトを始めました。

【規則】

制服も無い。名札も無い。禁煙規則も、掃除当番も無い。ラジオ体操も無い。デスクでコーヒーを飲んでもいい。お昼もデスクで取る。髪は茶色でもいい。髭も生やしていても構わない。ゴミ当番も無い。机の上が整理整頓できていなくても叱らない。朝礼も昼会も月例会もない。課長の前でうなだれている人の姿も無い。電話でがなりたてる人の声も聞こえて来ない。

【お茶くみ】

でも、驚いたことがひとつありました。おもしろくて笑ってしまいますが、女性がお茶くみをするんです。社員の人のデスクに1日に何回かお茶を配るんです。人権問題や女性問題という観点からはよろしくない話でしょうが、女性の方はいかがに思っているのでしょうかね。

【静か】

前の会社と大きく違っているのは、静かなことです。人が人を叱っていたり、怒鳴り散らしている人が全くいないということです。聞こえてくるのは、パーテーション越しにひそひそ話をする人の声だけが届いてきます。しかしそれを誰も咎めようと思いません。

【ぐれる】

誰でも一度は道を外れそうに、または外れてみたい気持ちになったりすることがあると思います。逃げ出したくなるのです。親と対立して社会的にも償わねば成らない人も出るかもしれません。それは悲しい話ですが、多くの人は必ず正しい道に、まっとうな道に復帰します。

【信頼する】 規則も無く拘束も無い職場の人が、なぜこれほどごく普通に仕事をこなし、持ち味を生かしているのか。答えは簡単です。人が人を信頼しているからだと思います。道から外れた人も、必ず正しい道に戻ってこれるのは、戻ってこれるところを用意してやることと、そこでその人を信頼してやることです。

【懲らしめる】 首輪の着いた犬たちの序章部分で触れていますが、数限りない規則は、人を信頼していない証拠なのです。放っておくと悪いことをするに違いない。悪いことをしたら断じて許さず、罰をもって懲らしめる…という発想。ますます犬の調教の姿に近づきます。

【自由】 自由に仕事をさせれば、甘えも出ます。怠ける人も出ます。しかし、その率は厳しくしても同じかもしれません。まじめにコツコツと仕事をする人は必ず居ます。自由に振舞い、萎縮しないで発想することが大事なんです。そのことは20年も前から思いつづけていることですが、前に10年居た会社ですっかり忘れてしまっていました。貴重な哲学を思い出させてもらいました。

【やはり】

やはり、あの会社の人には首輪が着いている。その首輪を外したら、自由を得て野山を駆け回る犬のようになって、仕事などいいかげんになってしまうだろう。戻って来ないかもしれない。そんな犬が野生に開放されて、自然と闘って生きてゆけるのだろうか。

【スパインアウト】

私はそんな犬にはなりたくないし、そんな犬でないのだから、首輪の無い世界に飛び出した。会社の人から見たら「負け犬」だろう。しかし、私には自由なフィールドがあるのだ。彼らには想像することも理解をすることもできないフィールドです。

2002年11月21日（木曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】

首輪のついた犬たち その2 競争原理

《首輪のついた犬たち／競争原理》

鍋を食う 論理 人材育成 その疑問 その誤り 見えないもの 問いかけ

【競争原理】

鍋を食う ここにひとつの風景があります。大きなテーブルでお鍋料理をいただきます。子供のように、早い者勝ちで食べるのもひとつでしょう。鍋の中の食材を見渡し、人数に割り振って、「ひとり分はこれだけです」と仕切るのもいいでしょう。醜い取り合いをするのはやめて、自由に食べようと言う声も出しましょう。そこで、もしも、こんな意見があったらどうでしょうか。「自分の食べるさらに食材を載せるのは必ず自分以外の人がする」という良い意味での風習があったとしたら、どうでしょう。もしも、自分だけ先んじてしまおうと思えば、他人を追い出さねばならないわけです。

論理 この論理には、マイナス効果もあります。これを現代社会の企業競争の姿に当てはめてみると、ひとり勝ちのマクドナルドは、他社の宣伝をするか、ハンバーガーというもののイメージ宣伝をするという方法などを取らねばなりません。資本主義という流れの中を、競争論理を押し通してゆくことで企業が進化し発展し自己増殖できるというのが、経済理論ですから、全く進化を否定することになります。

人材育成 相当、以前から言われていますが、人材育成や企業発展には、「個人を大事にし、個性を生かし、それを育て、ご利益をいただき、社会に還元し、再び、個人の成就と成す…」というのが理想のようです。企業理念にそのようなニュアンスをあげたところも多いと思います。しかし、現実には、「個性を潰し、品質を均一化し、新しい視点やアイデアは棚に上げ、とりあえず競争に自分だけ勝って生き残り、他はどうなっても良い…」としか思えないようなことをしている会社や職場が多い。

その疑問

資本主義の競争原理を大義名分に推し進むのを間違っているとも言い切りませんが、その論理を都合よく解釈して生まれた結果第一主義や成果の数値化、利益こそがすべてで損益分岐計算を無視するものは淘汰されるべきだと考えられています。ある意味では当然です。しかし、こんな理念のものにあるシステム上で「年棒制」や「個人の査定制度」「双方向査定制度」などが正しく機能するとは到底想像できません。

その誤り もちろん無理矢理推し進めて、大きな犠牲や歪のもとにいつかは完成されるとは思いますが、しかし、実利ばかりを追い求める上記のような手法とは違って、「もっとゆとりを」と騒ぎ立てている現代社会であるのなら、実利以外を適正に計れる別の手法が考案されて欲しいものです。実利ばかりだと憂鬱になります。自分の皿には何も盛らないのに多くのものが盛られてくるという状況があったとし、その過程をもっとじっくり観測してやる姿勢が必要ではないでしょうか。人にはもっと知恵がある。それは、GDPを増やすために使われるべきものではないのではないかと。

見えないもの

まっとうに生きてゆきたいと思えば、そういう人であればあるほど、バランスシートの文字の色だけでなく、また、数字の大きさだけでないもの、その資料ができあがるまでの数々の人々の声を大事にしたいと思うのではないのでしょうか。なんだかそんな気がしたんです。ただ、それだけです。

問いかけ 本当に競争をすることばかりが、社会向上につながるのでしょうか。競争をしない人は社会を悪化させますか？

首輪のついた犬たち・その1

《首輪のついた犬たち・その1》

【序章】 【働き蟻】 【転職】 【首輪って?】 【考える犬】 【愚かさの始まり】 【低レベル】 【失望】
【閉鎖的】 【悲しい蟻たち】 【裸の王様】

あれこれと記憶にあるできごとを書き留めてゆこうと思います。

【序章】

タイトルを「首輪のついた犬たち」と仮設定してみた。何故、首輪なのか。何故犬なのか。やはりそのことから説明を始めねばならない。

首輪とは、その人の行動を拘束したり、(時には形ないものであったり、)一種の呪縛をもってして行動をコントロールするものであるとしましょう。犬とは、働く人たちのことです。つまり、働く人たちはコントロールされている話です。

【働き蟻】

その前に脱線の話を書きます。働き蟻の行動パターンの話です。昔、京都で、ある先生(河合先生か日高先生、森先生だったかもしれない)の講演でお聞きした内容で、「働き蟻を観察します。例えば100匹がせっせと働いている姿を観察しますと、一生懸命働いているのは80匹で、残りの20匹はサボっている。そこでその80匹の蟻ばかりを、同じように100匹集めて行動を観察すると、80匹が一生懸命に働き、20匹がサボる。」というのがありました。その講座の本筋ではなかったのですが、面白い観察結果なので印象に残っています。この話はとても人間の行動や心理を代表しています。「首輪のついた犬たち」を観察する上でも重要な視点となります。〔閑話休題〕

【転職】

私が初めてその職場を訪ねたのは、1900年の秋のことで、当時、配属先の部長だったTさんが設計部門のフロアをつれて案内してくださいました。(この職場は)「どんな印象ですか?」と質問を受けたのをしっかりと記憶する。そこで私は「綺麗に整頓されたところですね」と応えた。「そうかなあー」とTさんは呟いておいでだったのも覚えている。新天地で大きな決意の元に一步を踏み出す私はすべてが美しく見え、誰一人として無駄のない人間ばかりにあふれ、使命感を持って動いているように見えた。仕事にやりがいを持ち、日々が充実している。理想郷とはこういうところなんだろう。そう思いました。同時に自分の実力に少しばかり不安を持っていました。そして、長期にわたって(第二の人生として)私はこの会社に勤めました。2002年の3月に今、流行のリストラで退職しました。

【首輪って?】

いつも感じていたことは、会社の形式上の同僚たちは、「働く人」であり、「首輪のついた犬」でありました。コントロールされることが日常化されたなかで、この犬の首輪をとき放したらきっと犬たちはどこかに行ってしまうでしょう。私は働く同僚を見ていつもそう感じました。何をしたらいいのかわからなくなる犬も出るかもしれない。日常に、会社という組織が、様々な形で犬を呪縛し飼い馴らしている姿がありました。親しい人にこのことを打ち明けたことがありました。「飼われた犬でいいじゃないか」と開き直られたことがあります。「そうですね」としか応えられなかった。きっと彼もジレンマにいたと思います。しかし、1度飼い犬になってしまったら、そんな楽な人生はないのだから、彼はその犬の生活を選んだのでした。

【考える犬】

しかし、犬になることを、何も悪いと私は思いません。成れる人はそうすればいいし、その判断は立派です。今、どうしても考察しておきたいのは、このような行動をとらせて犬を飼い馴らす会社の「社風」を、一般論として分析できないものかという、壮大な課題を抱いたのです。ひとつの事業場がどんなことをしているかを責めるつもりもない。私は負けて出てきた犬ですから。でも、行動を科学し、考える犬に私はなりたい。

【愚かさの始まり】

仕事場のフロアの掃除をする例を考えてみます。汚くても誰も掃除をしようとしません。何故ですか…と疑問に思いまし

た。掃除当番が決められていないから、自分が掃除当番でないから、だから自分のデスクや実験室が汚くても掃除を始めないのです。掃除は仕事でない、と思っていたのかもしれませんが。残業をするようになって驚きました。上司が早く帰ってなくなると、その部下たちも知らず知らずのうちに帰ってしまっていないのです。普段なら深夜近くまで残って、あれこれと頭をひねっている人たちが、あの仕事にかけける情熱をどこにやってしまったのか、と思いました。見られていなければ仕事をしない。または逃げ出す。そういうのは、この人には半ば常識だったんです。

【低レベル】

そんな状況では管理をする人が必要になります。掃除当番を決め、作業分担を割り当てる表を作り、仕事の進み具合をチェックする様々な手法を考え出します。クリティカルパスメソッドに基づいたきちんとした管理もあれば、小学生を咎めるような幼稚にしか見えない管理もあります。私はあまりの驚きに「校則で縛られて、自分らしさをまったく失ってしまった三流の高校のようだ」と言ってしまった。髪が長いと散髪に行けと言い、髭を生やすと禁止だという。服装のことも何かとうるさい。管理者だったM君は残業が終わって帰る前にデスクの電話で自宅に電話を入れていた。それを見て知っていた他のある人が、あるとき同じように自宅に電話をしたら、M君は厳しく私用電話を咎めたという事実も目撃しました。管理者は聖職で自分の悪行は神の成せるワザだとうことをこのひとつの光景が物語ります。

【失望】

職場の中では、こういう低レベルな管理が蔓延していました。当然、業務の管理にしても全く同じような論理で行われ、ひとりの人間がその人の脳みそを使って成した仕事を、いとも簡単に否定したり、その過程さえも無視したり破り捨ててしまうようなことが行われています。ひとつのタスクを成就する組織(ボックス)としては、素晴らしいものであっても、そのブラックボックスの中は、奴隷船のようで、個性もなく、生きがいもやり甲斐もなく、甘い餌に群がる犬のような(蟻のような)行動パターンでした。それは「ロボットのように絶望的に働いている」状態というよりは、「首輪のついた犬」の集団でした。

【閉鎖的】

しかし、生え抜きで身を捧げている人たちは、高校や大学を出て初めて出会ったこの社会が世界の常識だと思い込んでいますから、私の言っていることさえ理解ができないようでした。ある程度心を許した人であれば、「仕方ない、ここで生きられないのだから」と言って本意か虚心かは定かでないけど、私の意見に聞く耳を持ってくれました。そういう人は、しかしながら、こういう職場にはなじめないのでしょうか。配属を転々としてどこかに転勤して行ってしまった。

【悲しい蟻たち】

働き蟻のような私の同僚だった人たち。実にその実態は、管理されることで、自らの働く楽しみや、自主的に何かを成就する喜びを全く喪失してしまっていました。働く姿も立派でしたが、先に書いたように「サボる蟻」のような人も多くいました。自分たちを支えてくれるのは大企業です。健康保険、福祉、就業条件など様々な面で、高水準を保障され、満足のいく船です。社会的ステータスも最高です。そういう後光に支えられていました。生きる力をしたたかに備えながら、上手に働くふりをする。こういう人たちを肥大化した企業は育ててきた。だから、リストラという大きな構造改革をしなくてはならなくなって、しかもそのやり方がものすごく下手なのです。

【裸の王様】

おかしくなるばかりでした。しかし、私にはそれが「裸の王様」の集団のように見えて、自分を妥協させるのに罪悪感さえおぼえるようになったのです。相思相愛の全く逆で私は2001年の秋に退職することを、言いました。会社の筋書きどおりだったのが悔しいけど、後悔はありませんでした

私は平気

2002年2月21日

花粉がそろそろ舞っているようです。

私は平気。

ある新聞社のWEBサイトに求人募集がありました。

アップロードの日付けは半年ほど前のものだったので

おそらく消し忘れではないかと思いました。

しかし、こちらはそうも言うておれない状態です。

募集年齢も35歳までとなっていました、承知の上で

履歴書を送ることにしました。

事前に電話をすると断られるかもしれないので、

電話をせずに、封筒に履歴書を入れて手紙を添えました。

- ・募集は終了しているかもしれないけど応募すること
- ・年齢が要件の合致しないが、検討して欲しいこと
- ・以前に受けて不採用となって悔しいので、もう一度受けること

そんなことを、下手くそな文章で書くなぐって出しました。

そしたら、数日後に電話があつて、

- ・お給料が少ないこと
- ・希望してる部署以外の仕事はダメなのか

という問い合わせがありました。

ただただ、会わせて欲しい、とだけを強調しました。

会わねば何も分からないからです。

そういうわけで、2月の19日に会社を訪問ができることになりました。

次の日には現場も見学できました。

私が応募を出さなければ、人材採用などおよそ考えていなかったのかも

しれませんのに、押しかけていきましたら会ってくださると言う。

すぐに利益につながる人間ではないことは、明らかですが

ひとつの目標を掲げて、それに向かってやらせてもらえると言う。

どんな返事をもらえるかは全く不明ですが、新しい人生(それを

今の会社の人事部長は第三の人生と言っていました)に上手く

乗りたいものです。

祈ってください。

2002年2月21日（木曜日）【銀マド・名作選】、【雷山無言】

雀はなぜ、電線から落ちないのですか？

質問: 雀はなぜ、電線から落ちないのですか？

答え: 落ちそうになったら、飛べばいいから…

—

私は、この問答が大好きである。どんなに苦しい状況になってもこの雀の姿勢が大事なのだと思う。

2月20日。ある新聞社の印刷部を見学した。

輪転機が回り、何百枚／分という新聞を刷り上げる。

ここにいる人たちの一日は、この一瞬で決まる。

そういう緊張感や使命感の中に、すこぶる冷静さを感じた。

落ちそうになったら飛べばいいと答える雀は絶対に危なっかしい気配も見せない。冷静である。

2002年2月20日（水曜日）【[銀マド・名作選](#)】、【[雷山無言](#)】
